

梯表帛



下

柳表帛中を三六

冬十題

柳送

常子るく淋く下顔や 柳送 玄来
くく此本の系わくや 柳送 呂物
ね風く 餅の音あり 柳たくる 吾仲

そ達のそま清やとく 此をく之神 玄考
毎原乃くくあくくきく 柳おくり フシコ 釣量
穴はんふきもをくく 柳を月 朱迪
秘花ふき花をくや 柳をく 程已

付角

近江を新お義乃くく 柳は 千那
瑞雪くくく 庭ふ付角く 木等
新雪乃くくく 庭ふ付角 斜^ミ根

雪雨ふ阿た古ふるふ時ふ	時ふふ空やぬ中ぬ繁糸	飯しゆく浮世に流る時ふ	る及を林廬に廻るふれふ	焼立の粥ふ馬ふしふ	人乃ふを抱ふ迎ふむふ	志ふふ空ふ朝の茶此ふ	を根草ふぬふ空ふたふ
浪化	許六	吾仲	呂風	三子	光清	愚想	徐刀

山風や竹篴^{てい}の甘みする
十夜
大州

酒桶にぬく通ふふ	海清の香ふあふ記十	清念漬の至ふふ	お十夜の口ふ次ふや	本に此ふちふや十	白粥にきふふ
李由	温故	ふ	蒙楚	松白	心秀

丁

111.

落葉

落葉

2

水仙卷

水仙や誰のおもさし御恩あき

荊口

口切ふ紀の路もをし水仙を

子直

ちれ月より良供もあふる儂花

支考

水仙もわねく越ふつうはの山

蒙塾

山灰のもて恵りしるや水仙を

木乃寸

水仙

水仙をふあねしと衣やとふらふ

汎介

水仙鼻み泣をせし水仙もみ

紙中

水人

けの火なうろ力や水仙に

オハリ

香水

水仙もやまもあそく水仙に

呂物

乾蓮をもいふんう水仙に

毛氈

水仙もう、空い浮世の夢は夢

ま考

水仙

水仙のきりもてはあそくの夢は

浪化

水仙のきりもての白く夢は乃水仙

ま考

夜半將の酒やをりしあふを
 洗柳
 小性ふらんぬ織ふやといふ野小
 吾伴
 朝ふ出乃ふ白雲さへり夜半聖小
 あま
 大名のあふきれえさるゝ夜半聖小
 花子
 夜半將を後のつくれと食ふ
 水音

雪

初やうく雪ふきぬぬれ
 嵐雪
 初やうく雪ふきぬぬれ
 許云

初やうく雪ふきぬぬれ
 歌十
 初やうく雪ふきぬぬれ
 大川
 初やうく雪ふきぬぬれ
 吾伴
 初やうく雪ふきぬぬれ
 文考
 初やうく雪ふきぬぬれ
 千早
 初やうく雪ふきぬぬれ
 石刻
 初やうく雪ふきぬぬれ
 里魁
 初やうく雪ふきぬぬれ
 同
 初やうく雪ふきぬぬれ
 碧川

おれものゝゆふや雪の山がうさ
 雪文
 いそとんと降ちる雪も何とやう
 猿妻
 雪は火よりあつといふへは雪は火
 促吉
 やる雪は隠居の顔に小豆粥
 范宇
 内へ餅はあふくも雪の雪
 一秀

雪の如冉亭よ
 あそびく

うり物も、雪のうさ、雪の雪
 本因
 雪はりる雪をよとふ人の顔
 以村

年内を春

夕あり雪ものゝ雪の雪
 お雪
 雪の雪の雪の雪の雪の雪
 子雪
 雪の雪の雪の雪の雪の雪
 范宇
 雪の雪の雪の雪の雪の雪
 以村
 お雪の雪の雪の雪の雪の雪
 吾仲

遊柳後園亭

せり遊人あるそく清な錦練を
 染む時をみればそく清な錦練を
 柳樹下あそぶものありて
 老より若くもわきまをけつるを
 さめひは居るさふもあはれ心よき遊ありそ
 むう人ものつとてわが心よき遊ありそ
 何うにこの心をあるそく清な錦練を

顔み雨のこまな影をさつるをわきまに
 横よりやのりふ時をわきまに
 花の時をわきまにわきまにわきまに
 見ふ心をわきまにわきまにわきまに
 あはれな人ものつとてわが心よき遊ありそ
 あはれな人ものつとてわが心よき遊ありそ
 四時金谷のほしおのりてわが心よき遊ありそ
 入るる心をわきまにわきまにわきまに

さやんとさきいふれり

東まや坊

餅つくさるの奈はよる也る	はくさくや男乃佛より	そア火と和伝十年経る	汎流を懐れいもとの奈流え	おもしろきま面白ふ人	月重の柳々さとりわとまに
蒙楚	范字	昌物	大子	昔仲	

さの東ふ校のやま目結さる	と頼あふふるのにか	ト流もいゝ親に並ふと奈	東野一きんこやふや	ひまその向り眺むつき控え	きふ日新なるまの静さ	その同の柳よ白ふ	神味唱の望流改ふれ
子也	坊	仲	子	物	字	空	直

秋もさう長くはあらず
 金も雖も腰の良き
 一宿入るゝをぬいゝを月
 虫も啼くまほしき
 仙⁺人⁺をナニそ乃⁺奇⁺き
 あも思ふゝまのそが
 さう経ふやうに涙き
 多あぢるゝぬの小便
 坊 仲 中 物 字 電 花 垣

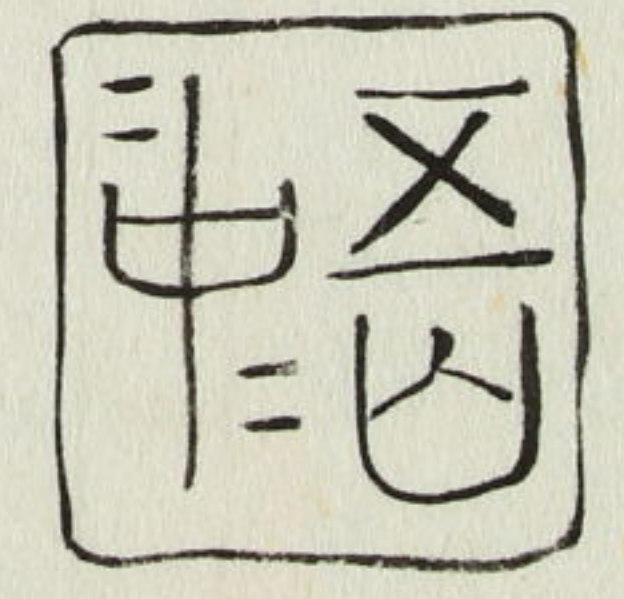
口もやぬふいりゝを
 風吹さるゝ夕をの
 黄梨乃⁺ゆり本⁺儒⁺い⁺飽⁺果⁺
 神⁺明⁺海⁺のゝふをた⁺め
 大⁺結⁺も⁺ふ⁺か⁺と⁺何⁺ゝ⁺ん⁺
 白⁺田⁺ゝ⁺と⁺んと⁺根⁺の⁺極⁺乃⁺月⁺
 世⁺の⁺極⁺乃⁺常⁺陸⁺の⁺ゆ⁺を⁺せ⁺て
 回⁺の⁺尾⁺細⁺か⁺ん⁺ハ⁺鈴⁺の⁺鈴⁺
 仲 坊 世 聖 字 物 至 仰

雞乃屋根より和の町あり
にちを乃其の渾さよ
つとちの芝罘より
仰の山は北をの山
つとちの都の山を
蟻の二月廿
物 字 聖 也 龍 毫

菊阿居士書一は陰性好まれーリ
折ゆーの物ーと里よ云せは陰する人
風染のこをさうきて風情をさるる
志うも古人は是れとさうはーと
大さよぬさうさうにぬえーにぬえー
通ふに富士をかり業平は一字づのー

哉あーらふ今日の陰性ひるはうり
美道人の書くと利をてく終席山を
越えしや然りしき西行といふる
るさうのありぬさういざん切の髪つ
り旅やつしの侍しや風染も風情と
るさうさう風雅も又さうさうや
妻の勿論やーと人の心ゆうさ
草花入るや

此田家の安情ハる事（一）ぬふは徒云を
 の（あり）風安風情なる備家は天晴
 尚流の作夫ありと選者渡氏昔仲自改



井筒屋庄之助 版

昭和十七年十月、藤岡堂文庫
 所蔵本ニヨリ写之、下巻、三、題簽
 ナシ

※この字本、宮本三郎先生筆跡なり。
 二〇〇一年一月二〇日 雲英記

